保育計画成果報告書

法人名等	社会福祉法人　風の馬
施設名	ペガサス福泉中央こども園
報告者（役職）	横田　多希子（園長）
住所・連絡先	大阪府堺市南区稲葉 1-3131-2
	☎　072-275-1234 E-mail　fukuizumi@pegasus.or.jp

〇タイトル（保育計画）

インクルーシブ教育・保育を行い、すべてのこどもが一緒に遊んで学ぶ！！

〇主な助成備品

ままごとセット等の遊具

１．保育計画策定の目的

ペガサス福泉中央こども園は公立園の民営化にあわせて、障がい児通所支援事業所を併設し、健常児と医療的ケアが必要な子どもが一緒に生活し、一緒に遊び、障がいの有無や医療的ケアの有無、国籍などにこだわらないインクルーシブ教育保育を行い、すべての子どもが自分もお友だちも先生も大好きになれる園を目指しています。
子どもたちに必要とされる「運動能力」と「感性」を育むために室内遊びや園庭遊びを充実させて、よりよい成長や経験を培うために、すべての子どもが一緒に遊び、生活できるよう、よりよい環境の構成を策定しました。

２．具体的な実施内容

室内遊びの充実
室内遊びを通して、集中力や思考力、記憶力、構成力、想像力を身につけるため、室内にコーナー遊びを設けることで子どもたちが自分の意志で好きな遊びを見つけ、遊びに集中でき、主体的に行動できるように配慮しました。

園庭（戸外・自然に触れる）遊びの充実
子どもたちが自然と触れ合う中で感性や好奇心、探索や意欲、創造力を育むことをねらいにさだめ、０歳児から戸外で思いっきり伸び伸び遊び、水遊び、砂遊び、遊具等、他では体験できない遊びを、こども園で安心してたくさん経験し、体験を積み重ねられるように教育保育を実施しました。

異年齢児保育の環境構成や発達に応じての取り組み
様々な年齢幅で楽しめる玩具やグループなどでみんなと遊べる玩具、ごっこ遊びなどの見立て遊びや、集中して遊べる玩具など子どもたちの年齢や発達にあった環境を整えます。０・１・２歳児にはゆったり過ごせるスペース、３・４・５歳児は動きのある遊びスペース等、異年齢児の発達レベルにそって環境設定を行いながら、インクルーシブ教育・保育を実施するために、障がいの有無や医療的ケアの有無にかかわらず子どもたちが一緒になって触れ合える環境なども配慮することにより、関わりが深め合え、人への思いやりなども育み、自分とはちがう体や心の特性、考え方をもつことを一人ひとりが認め、これからの共生社会を創っていく一員としての基礎を育みます。

３．その成果と評価

ままごと遊び

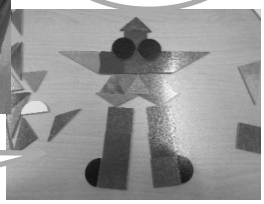
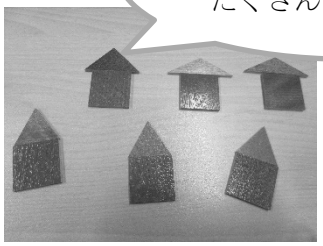
０・１・２歳児は、料理を作る過程を再現して遊ぶことで、混ぜる・切る・炒めるなど手首や指先を使い存分に遊ぶことができました。また、0・1 歳児や国籍の違う子どもは、ままごと遊びのなかで、『もぐもぐ』『あーん』『ジュージュー』等のオノマトペを使ってやり取りを楽しむ姿があり、ままごとは、子ども同士のコミュニケーションが培われる遊びであると感じました。ままごとの道具を使って遊びを展開し、夏には、氷を使って遊びました。玩具と違いひんやりとした感覚を指先で感じながら、『冷たい！』と感じたことを言葉にしたり、いつものように混ぜる・炒める動作をして、氷が水となり溶けていく過程をじっくり観察したり、形の変化も楽しんでいました。ままごとを通して、言葉のやり取り、摸倣、異年齢児との関わりが生まれ、想像し考える力・集中力・相手を思いやる力が育ちました。

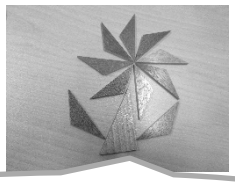
（遊びの中で発達を促す）

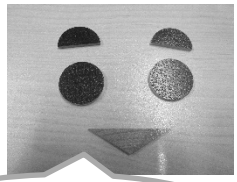
５歳児の A ちゃんは、立位が確立していません。友だちがキッチン台でおままごと遊びをしていると、楽しい笑い声に A ちゃんもキッチン台の様子が気になり始めました。最初は、膝をつきキッチン台の上の玩具に触れていましたが、保育教諭が、脇を支えてあげると、自らキッチン台を支えに、つかまり立ちをすることができました。おままごと遊びを通して、やってみたい！一緒に遊びたい！という楽しい体験の中で、子どもは最大限の力を発揮するのだと感じました。

知育遊び

知育玩具遊びでは指先を動かすことにより、集中力や創造性、認識力を高めることができました。六色三体の天然木知育玩具では、一つずつ小さな穴に紐を通して遊んでいましたが、二つ積み重ねた積み木に紐を通してみようとする姿や、たくさんのきれいな色があることに気づき、色分けして並べる姿も見られました。色の名前や形を友だちと伝え合うことで覚えたり、何個あるのかな？などと数えてみることで、数字に興味を持つ姿も見られました。色板では、簡単な三角と四角を組み合わせて、お家作りから始まり、次は三角だけを使った風車や丸型のお花やお花が崩れるとスズランのようになることで、形の変化も楽しむ姿も見られました。そのほか船や電車、子どもの創造があふれ出たロボットの様な作品もできるようになりました。

ロボット
作るわ！

ロボットの完成

初めは可愛いおうちが
たくさんできました。


風車からお花になりました。


お顔の完成です。

運動遊び

運動遊びでは、運動機能がまだまだ未熟な１歳児が木製滑り台を使用し、全身を使って遊びました。坂道をあがる時は両手を前につき、手から足と順番に前に出し身体を支えながら登りました。その繰り返しを行っているうちに、腕や足の筋肉が発達し、ゆっくりだった速度が徐々に早くなり、また子どもたちの緊張した雰囲気がやわらぎ、笑顔で遊ぶ姿が見られました。あがりきった後は滑るだけですが、スピードを調整するため、サイドを持ち滑る子もいたり、持たずに一気に滑り降りる子など様々でした。ただ滑るだけではなく、体幹がつくことで、自分なりに調整して遊びを楽しむことができていました。
また、運動会で、子どもたちが遊びを通して全身の筋肉、身体のバランス感覚を養ってきた姿を保護者の方にも披露しました。

４．今後の課題と展望

乳幼児期に様々な遊びを繰り返し行うことで、子どもたちの著しい成長が見られました。また、異年齢児教育・保育を行っているため、年齢の低い子は年齢の高い子がしている遊びに興味をもち、あんな風に作りたいとチャレンジする姿が見られました。そのほか、遊びを通して、異年齢児と関わりを深めることで、コミュニケーションの図り方を学ぶことができたり、言葉の理解や相手の気持ちの理解など、様々な生きる力を培うことができました。

今後も、今まで行ってきた遊びを継続し想像力を豊かにすることで、様々な取り組みに自信を持つことができるような教育・保育の環境を整えていくことが必要です。そのためには、物的環境だけでなく、保育教諭の関りも大切であり、一人ひとりの子どもの発達や考え方、感じ方などを理解しその子に応じた対応を心がけてまいります。

すべての子どもが一緒に生活し遊ぶことを目的としています。国籍の違いがある園児も多いため、言葉でなかなか通じ合えないこともありますが、遊びを通してコミュニケーションを深め理解し合うことができたり、障がいや医療的ケアをもった子どもとの関りでは、障がいのある子どものスキルが上がったり、学びや刺激になりますし、何も変わらない空間でみんなで一緒にこども園で生活することは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、 人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会に繋がっていくと考えています。将来子どもたちが共生社会を実現するための基盤の構築に努めてまいります。

以上